

東京の都市計画における御料地の位置付け

—紀尾井町の事例に着目して—

細見陽哉（経済学部3年）

指導教員：長田進教授

御料地とは天皇及び皇室によって所有され皇室財産となった土地を指す。明治初頭から戦前にかけて東京の中心部に形成された御料地は、戦後に公共施設や大型の商業施設へと転用され東京の都市形成において重要な役割を果たしてきた。これまで東京の御料地に関しては、天皇論や歴史学、文化人類学の観点から研究が行われ、天皇家の権威・伝統が都市空間に与える独自性や特殊性が指摘されてきた。一方、具体的な土地利用の変遷や計画的意図との関係など都市計画を軸に東京の御料地について論じたものは少なく、都市形成史の面からは明らかにされていない点も多い。そこで本論文では、御料地の空間構造や分布の特徴、都市計画との関係に着目し、東京の都市計画史における御料地の位置付けを検討した。

まず研究の前提となる東京の都市計画に関する先行研究を整理した上で、東京の御料地について文献調査を行った。都心部を中心に約30ヶ所の御料地を対象とし、それぞれの形成過程と分布構造、現在に至る土地利用の変遷を調査した。東京の御料地は明治から昭和初期にかけて主に皇居の西面から南面、山手の大名屋敷跡地を引き継ぐ形で発生し、現在では好立地と土地の広さを活かして公共施設や商業施設、学校、公園として活用されてきたことが分かった。

次により詳細な事例研究として紀尾井町を取り上げた。紀尾井町は、起伏に富み緑地や水辺空間が豊かな山手の典型的な自然環境を備え、大名屋敷以来の来歴が色濃く残っている。戦後には学校、公共施設、商業施設などに転用された紀尾井町の姿は東京の御料地を代表するものである。紀尾井町に関する東京都や千代田区の計画資料、民間の建設事業に伴う発掘調査などを中心に文献調査を行い、時々の政策や都市計画が紀尾井町の都市空間に与えた影響、各時代の一般的な土地利用との異同を確認した。

以上の調査を踏まえ、本論文では東京の都市計画において御料地が果たした役割は、近世都市江戸の骨格を近代都市東京に引き継ぐ基点になったこと、都市計画の受け皿として各時代の施策を反映し東京の都市形成をリードしてきたことにあると結論付けた。